

フィルムのなかの日常

カメラと暮らした昭和の記憶

2026 3. 9 MON – 7.10 FRI

広島市公文書館

はじめに

昭和30年代の日本は、戦後復興の歩みとともに街並みや暮らしが大きく変化した時代でした。三種の神器に代表されるような、さまざまな家電製品が登場し生活は少しずつ便利になる一方で、火鉢やタライを使うような昔ながらの暮らしも共存していました。

本展「フィルムのなかの日常～カメラと暮らした昭和の記憶～」では、平成26年度から令和6年度までに当館へ寄贈された写真資料の中から、昭和の広島に暮らした6人のカメラ愛好家たちによる写真58点をご紹介します。街角の風景、家族や友人との時間、地域行事の賑わいなど、写真には時代の空気と人々の営みが刻まれています。彼らが写した、どこか懐かしさを感じる昭和の記憶をたどっていただければ幸いです。

1 シャッターチャンス

昭和30年代には次々と日本製カメラが開発され、カメラブームが広がった。カメラを手にした人々は、家族や身近な風景などの写真を多く残し、その中には大雨や大雪のあとの「いつもとは違う景色の中で生活する人々」を捉えたものも少なくない。非日常の光景は、彼らにとってのシャッターチャンスだった。そこには、大雪や大雨に見舞われてもたくましく生きる人々の姿がある。

 **大雪** 昭和31年2月11日、午後5時ごろから雪が降り始め、広島地方気象台は午後9時半に大雪注意報を発令した。12日正午過ぎには、広島市内の積雪量は28.5cmに達し観測史上2番目の大雪となった。日曜日だったため、比治山や広島城跡でスキーをしたり、雪だるま作りをしたりと、大人も子どもも楽しんだという。

 **大雨** 海拔の低い土地が多い広島市では、大雨による浸水が年々深刻化していた。昭和39年6月27日、朝から6時間も続く集中豪雨に見舞われた。下水道に溜まった雨水はポンプで川へ排水していたが、その日の雨量が排水能力の2倍に達したうえに、市内を流れる川も満潮であふれていた。下水の雨水は市街地に逆流し、宇品、千田、江波、観音、己斐など広島市の南側に加えて、広島駅周辺や戸坂、牛田地区など広範囲が浸水した。



1 大雪の日 八丁堀
昭和31(1956)年2月 [I]



2 雪だるま作り 仁保
昭和32(1957)年頃 [O]



3 大雨の日 大手町
昭和32(1957)年7月 [I]



4 大雨のあと 川内
昭和32(1957)年7月 [N]



5 大雨のあと 千田町
昭和39(1964)年6月 [H]



6 台風10号 大州通り
昭和45(1970)年8月 [O]



7 旧日本銀行広島支店前道路工事 袋町
昭和 31 (1956) 年 6 月 [I]



9 年賀状配達 基町
昭和 33 (1958) 年 1 月 [H]



10 年賀状配達 基町★
昭和 33 (1958) 年 1 月 [H]



8 電線工事 小町
昭和 33 (1958) 年 7～8 月 [H]



11 花売り 竹屋町
昭和 36 (1961) 年 1 月 [H]



12 魚の行商
昭和 30～40 年代 [O]



13 紙芝居屋 仁保
昭和 28 (1953) 年頃 [O]

2 街角スナップ

📷 街中 広島市では復興都市計画によって道路が拡幅・新設されると、路面電車の軌道の再編成も必要となり、大がかりな移設工事が実施された。昭和 31 年度には鯉城通りの幅が 15～19 m から 40 m へ西側に大きく広がり、紙屋町一鷹野橋間の軌道も移設。掘削や運搬は作業員の地道な力仕事に支えられていた。

また、戦後すぐの街には狭い路地が多く自動車も普及していなかったので、物資を運ぶ手段として自転車やリヤカーが庶民の生活を支えた。どちらも誰でも扱えるという実用性と機動力を備えており、工事現場での運搬や、移動販売などで活躍した。

📷 通信 昭和 24 年 12 月には、お年玉くじがついた初めてののお年玉つき年賀葉書が 1 億 8000 枚発行された。1 枚 2 円と 3 円の 2 種類があり、3 円の葉書には共同募金と赤十字募金を合わせた 1 円分が含まれていた。気になるくじの特等は高級ミシン、1 等は純毛洋服生地、2 等は学童用本皮グローブ、3 等は学童用洋傘で、6 等は現在もお馴染みの記念切手だった。昭和 32 年には約 7 億枚の年賀はがきが発行され、元旦から学生アルバイトなどによって配達された。

📷 娯楽 昭和初期に始まり 20 年代に最盛期を迎えた紙芝居は、こどもたちにとって身近な娯楽だった。紙芝居屋は自転車で町を巡り、拍子木の音でこどもたちを呼び集め、こどもたちは観覧料を払う代わりに紙芝居屋から買った水あめなどの駄菓子を食べながら紙芝居を楽しんだ。ヒーローものは特に人気で、『黄金バット』のような映画やテレビアニメになる作品も生まれた。

3 ぼくらの毎日

📷 おやつ 昭和 32 年に全国発売された明治製菓株式会社の「明治天然オレンジジュース」は、日本初の缶入りジュースとして話題を呼んだ。缶ジュースには小さな缶切りが付属しており、2 つの穴（飲み口と空気穴）を

開けて飲むものだった。瓶より軽く、どこでも手軽に飲める利便性が受け入れられ普及していった。

リヤカーに積んだ蒸気圧力釜に、米やとうもろこしなどの穀物を入れて圧力をかけ「ポン！」という破裂音がすると「ポン菓子」完成の合図だ。砂糖水などで味付けをしたおやつだった。ポン菓子屋が広場などに現れると、子どもたちは米などの穀物を自分の家から持って集まった。

遊び 昭和 20 年代後半にはセルロイドやソフトビニール製の人形が人気を集め、寝かせると目を閉じる「ミルク飲み人形」は少女たちの憧れだった。昭和 30 年代に入ると、髪をとかしたり結んだりできる「カール人形」が流行し、遊びの幅を広げた。

昭和 20 年代後半からマンガが子どもたちの新しい楽しみとして定着し、子ども向けの月刊誌では読み物ページが減ってマンガ主体の雑誌が増えた。昭和 30 年代初めには貸本漫画がブームとなり、貸本屋には子どもたちが集まった。

回旋塔は支柱を中心に傘のような形の輪が回転する遊具。釣り輪につかまったまま走って回転させると、遠心力で体が浮きあがった。公園には他にも箱ブランコ、遊動円木など、今では安全面から姿を消した遊具が並び、子どもたちは裸足で竹の棒を登るなど、全身を使って遊んでいた。学校では運動会が地域ぐるみの行事としてにぎわい、



14 明治天然オレンジジュースを飲む 楽々園
昭和 34 (1959) 年 5 月 [K]



15 凧揚げ じぞう通り
昭和 32 (1957) 年 12 月 [H]



16 丸太遊び 大州
昭和 33 (1958) 年頃 [O]



17 路地に落書き 江波
昭和 30 (1955) 年 2 月 [I]



18 ゴム飛び
昭和 30 年代初め頃 [H]



19 カール人形
昭和 33 (1958) 年 4～5 月 [K]



20 ついた餅を運ぶ★
昭和 38 (1963) 年 1 月 [O]



21 火鉢で餅を焼く
昭和 30～40 年代 [O]



22 マンガ雑誌の立ち読み
昭和 34 (1959) 年 [H]



23 ポン菓子
昭和 33 (1958) 年 5～6 月 [H]



24 キャンプ場へ 亀山水力発電所前
昭和 35 (1960) 年 10 月 [K]



25 入学の日 千田小学校
昭和 39 (1964) 年 4 月 [H]



26 初めての勉強机
昭和 39 (1964) 年 6 月 (H)



27 回旋塔 千田小学校
昭和 31 (1956) 年 (H)



28 登り棒 仁保小学校
昭和 31 ~ 32 年 (O)



29 体育学習発表会 袋町小学校
昭和 36 (1961) 年 10 月 (K)



30 運動会 川内小学校
昭和 30 (1955) 年 (N)



31 運動会 川内小学校
昭和 36 (1961) 年 10 月 (N)



32 プール開放 千田小学校
昭和 39 (1964) 年 7 月 (H)



33 海水浴 向宇品
昭和 29 (1954) 年 8 月 (F)



34 川遊び 元安川
昭和 37 (1962) 年 7 月 (H)

PTA や地域住民も競技に参加した。

夏の定番は海水浴で、ビニールキャップと水着を身につけた少女の姿は当時の典型的なファッションだった。川遊びも身近なレジャーだったが、公害による川の汚染が進み、昭和 41 年までに市内の 6 つの河川は泳げなくなった。

📷 生活 主要な暖房器具として火鉢が使われていたこの頃。火鉢のある部屋は暖かくなるので、家族がみんな集まった。大きな炎が出ないようにすれば、こどもたちだけでも使えたため、湯を沸かしたり、金網の上でかき餅や干し芋をあぶったりして小腹を満たした。

4 ご近所スナップ

📷 家電 昭和 30 年代半ば、白黒テレビ・冷蔵庫・洗濯機が「三種の神器」として登場し、豊かさの象徴となった。

昭和 28 年のテレビ放送開始に合わせて発売された国産テレビは、チャンネルを手でガチャガチャと回すダイヤル式だった。新聞には「わが家でゆっくりくつろいで佳境に入ったナイターを楽しむ…これこそテレビのだいご味と申せましょう」と宣伝する広告が掲載されている。昭和 34 年の皇太子御成婚パレードをきっかけにテレビは一気に普及し、家庭の娯楽の中心となった。



35 ブラウン管テレビ
昭和 34 (1959) 年 5 月 (H)



36 ちゃぶ台を囲んで
昭和 34 (1959) 年 12 月 (F)

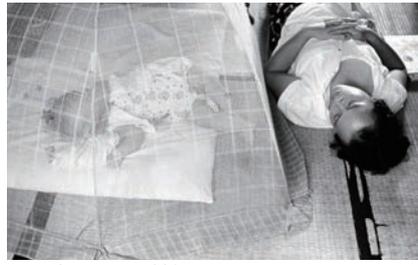


37 たらいで洗濯
昭和 30 (1955) 年 11 月 (I)



40 手作りの船
昭和 33～34 年

〔K〕



38 赤ちゃん用蚊帳
昭和 33 (1958) 年 7 月

〔H〕



39 氷で涼む
昭和 37 (1962) 年 7 月

〔H〕



41 長屋の庭で毛糸巻き
昭和 35 (1960) 年 8 月

〔H〕



42 長屋の庭で散髪
昭和 37 (1962) 年 3 月

〔H〕

家庭用クーラーが普及するのは昭和 40 年代に入ってからで、夏の暑さをしのぐには団扇や籐枕、氷屋から買った大きな氷が頼りだった。また、電気冷蔵庫が普及するまでは木製の氷冷蔵庫に氷を入れて庫内を冷やしていたので、氷屋は毎日リヤカーや軽トラックで町を回って客が必要な大きさの氷を切り売りした。

📷 生活 当時の生活では椅子やテーブルは一般的ではなく、家族はちゃぶ台を囲んで食事をした。ちゃぶ台は折りたたんで片付けられるため、同じ部屋を食事・団らん・就寝の場として使い分けることができた。

家事は今よりはるかに重労働で、洗濯は大きな金ダライと洗濯板を使った手洗いが主流だった。

物は繰り返し使う暮らしが基本で、一度編んだ毛糸をほどこいて別のものやサイズの違うものに編みなおしたりした。

5 にぎわいスナップ

📷 お出かけ 百貨店では季節の催しがにぎわいを見せ、昭和 36 年 1 月には天満屋がこの年の干支である丑にちなみ、屋上に岸本牛乳の子牛たちを招いたイベントを開催。クイズに当たれば岸本牛乳や牛乳石鹸がもらえるとなり、家族連れでにぎわった。食堂で外食することも、百貨店へ行く楽しみの一つだった。

行楽の季節になると、隣近所に声をかけてみんなで名所に出かけた。ごぎの上に瓶ビールやとっくり、仕出し弁当



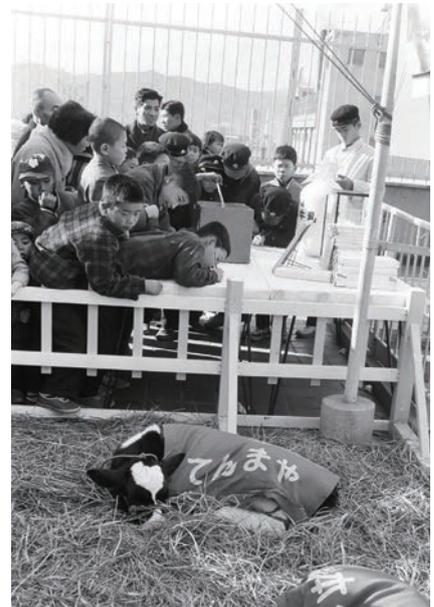
43 公衆電話 広島駅ビル地下
昭和 41 (1966) 年 12 月

〔F〕



44 市内電車に乗って
昭和 37 (1962) 年 1 月

〔H〕



45 子牛の展示 天満屋
昭和 36 (1961) 年 1 月

〔H〕



46 大食堂 福屋
昭和 33 (1958) 年 3 月

〔N〕



47 お花見 三瀧寺
昭和 39 (1964) 年 4 月

〔H〕

も忘れずに。こどもはバナナを手にご機嫌。高級品だったバナナも、輸入自由化により昭和30年代終盤には手ごろな価格になった。

出先からの連絡に必要なのが公衆電話。昭和26年に店頭設置の公衆電話が登場し、昭和28年からは赤く塗られた「赤電話」が普及した。市内なら10円で3分間通話でき、遠い場所ほど話せる時間は短くなった。

📷 祭り 祭りの出店ではわたあめや甘栗のほか、割れないシャボン玉のような玩具や、忍者や月光仮面のお面など、こどもたちの興味を引くものがたくさん並んだ。

亥の子まつりは、平安時代に宮中の年中行事として始まったとされる伝統的な祭りで、広島では地域のこどもたちが家々の門口で「繁盛せ、繫盛せ」と縄のついた石で地面を突いて回った。豊穰や無病息災を願うこの行事は、毎年11月頃に広島の町々で盛んに行われ、今も続く地域がある。

📷 セール 昭和29年、広島では特売のような催しが増え、福屋は12月7日から6日間「ご家庭向けお正月用品大特売」と銘打ち歳末セールを開催。紅白の幕とカラフルなちょうちんの露店が、道行く客を惹きつけた。

神武景気のさなかの昭和31年、開業から1年経った天満屋はこの百貨店や商店街よりも早く12月1日から年末のセールを始めた。巨大なサンタやリースで装飾しており、クリスマス文化の広がりを感じさせる。

📷 行事 家庭でもクリスマスツリーやケーキが並び、ちゃぶ台にはローストチキンや焼き魚、ご飯や熱燗が同居する和洋折衷の食卓が広がり、思い思いにクリスマスを過ごしていたことがうかがえる。



48 お祭りの出店 ふうせん
昭和33(1958)年10月 [H]



49 七五三の賑わい 白神社
昭和28(1953)年11月 [I]



50 お祭りの猿回し 白神社
昭和34(1959)年10月 [H]



51 亥の子まつり 小町
昭和36(1961)年11月頃 [H]



52 亥の子まつり 大手町
昭和31(1956)年10月 [I]



55 クリスマス会
昭和36(1961)年12月 [H]



53 クリスマス飾り 天満屋
昭和31(1956)年12月 [F]



54 クリスマス発表会 アライアンス幼稚園
昭和33(1958)年12月 [K]



56 年末大売り出し 本通
昭和33(1958)年12月 [H]



57 年末大売り出し 福屋 昭和 29 (1954) 年 12 月 [F]



58 年末大売り出し 昭和 30 年代初め [H]



59 結婚式 昭和 29 (1954) 年 3 月 [N]



60 門出 昭和 32 (1957) 年 [H]

戦後、結婚式も時代とともに変化した。ある結婚式では、新郎は洋装、新婦は和装に白いベールという組み合わせで臨んでいた。これは彼らの住む地域で当時推奨された新しい結婚のスタイルだったようだ。地域のつながりは強く、祝い事は近所総出で喜び合うものだった。門出を迎えた二人をひと目見ようと、憧れや祝福の気持ちにあふれたたくさんの人たちがかけつけた。

～～ 昭和のカメラ愛好家たち ～～

昭和 30 年代には外国製に代わって国産カメラが急速に発展し、20 年代後半に流行した国産二眼レフに続いて、各メーカーが競って新製品を開発した。昭和 34 年には日本初の一眼レフ「アサヒフレックス I 型」が登場し、依然としてカメラは高級品だったものの、昭和 36 年には手頃な価格の「キャノネット」が発売され大ヒットしたことで、一般家庭にもカメラが広まることとなった。

普及にともない、広島城や平和記念公園、比治山などではカメラ店やフィルム会社が主催するモデル撮影大会が盛んに行われた。前日には有名写真家による講演や指導があり、参加者には印画紙やフィルムが無料で配られることもあった。撮影会当日は一人のモデルを多くのカメラマンが取り囲んで撮影し、出来栄の良い作品は懸賞付きの撮影大会に応募された。また、職場や地域で写真クラブが結成されるなど、写真を楽しむ文化が広がっていった。

こうした撮影会は自動車や水着といった新商品の宣伝を兼ねることも多く、カメラ愛好家たちはイベントを通じて構図や技術を磨いた。



61 撮影会の宣伝をするチンドン屋★ 昭和 32 (1957) 年 11 月 [N]



62 サクラ撮影会 平和記念公園★ 昭和 30 (1955) 年 5 月 [I]



63 広陽カメラ倶楽部写真展★ 昭和 31 (1956) 年 5 月 [I]

昭和 39 年の年平均価格（広島市）

品目	単位	銘柄	価格(円)
鉛筆	1 本	墨芯、HB、消ゴムなし、上、 「トンボ鉛筆 8900 番」	10
ノートブック	1 冊	上質紙、A5 版、罫入、 約 30 枚綴	20
市内電車運賃	1 回	市内路面電車運賃	15
ジュース	1 本	オレンジジュース、びん詰、 200cc、「バヤリースオレンジ」	45
ビール	1 本	淡色、びん詰、633ml	115
テレビ	1 台	16 型、遠距離（遠くの電波受信） 用、回転式チャンネル、 スピーカー 2 個、中級品	46,500
電気せんたく機	1 台	自動反転うずまき式、 強弱 2 段切替、絞り機付	17,500
写真機	1 台	35mm レンズシャッター、 F1.9、45mm、標準レンズ、 シャッター B.1~1/500、 完全連動式、ケース代を含む、 「キャノネット」	16,700
フィルム	1 本	写真機用、35mm、 ss36 枚どり（パトローネ入※） ※フィルムが金属やプラスチックの カートリッジに入っているタイプ	180
写真焼付代	1 枚	引伸、手札型（約 8.3cm × 12.1cm の小型プリント）	20

出典『小売物価統計調査年報』総理府統計局 昭和 40 年 12 月発行

昭和 29 年 12 月から昭和 32 年 6 月まで 31 か月続いた、いわゆる「神武景気」は戦後の日本が初めて経験する高度経済成長でした。経済は戦前を上回るまでに回復し、昭和 31 年の経済白書には「もはや戦後ではない」と記されました。なべ底不況と呼ばれる停滞があったものの、昭和 33 年 7 月からは「岩戸景気」、昭和 37 年からは「オリンピック景気」と呼ばれる好景気がつづき、昭和 30 年代は人々の暮らしや街並みが大きく変化しました。

左の表には、昭和 39 年当時の品物の年平均価格をまとめました。また、昭和 40 年版の『市勢要覧』によると、昭和 39 年 12 月の新規大学卒業者（男性）の全産業の平均給与は 30,178 円でした。

電車に乗る、ジュースを買う、家電をそろえる——そんな日々の暮らしが、当時どれほどの感覚だったのかを思い描く手がかりとなれば幸いです。



※この解説パンフレットの著作権は広島市公文書館に帰属します。

★がついている写真はパンフレット掲載のみです。

ここに掲載した写真は、広島市公文書館デジタルアーカイブ・システムで見ることができます。



〈参考文献〉

- 『戦災復興事業誌』広島市都市整備局都市整備部区画整理課 1995
- 『被爆 50 周年 図説戦後広島市史 街と暮らしの 50 年』広島市企画総務局公文書館 1996
- 『広島市立学校沿革史』広島市教育センター 1989
- 『広島市市勢要覧 昭和 40 年版』広島市役所 1966
- 『小売物価統計調査年報』総理府統計局 1965
- 『いのこのまつり』佼成出版社 1991
- 『発見！ニッポン子ども文化大百科 ③昭和後期・平成』日本図書センター 2012
- 『身近なものの進化図鑑 ①電化製品』汐文社 2012
- 『こんな仕事があったんだ！昔のお仕事大図鑑』日本図書センター 2020
- 『消えゆくくらしのモノ事典』岩崎書店 2021

〈撮影者一覧〉

- [I] : 飯田 邦夫
- [O] : 大下 隆雄
- [K] : 蒲池 玄三郎
- [N] : 中岡 雅昭
- [H] : 林 邑一
- [F] : 藤塚 貴
(敬称略、五十音順)

名 称 令和 7 年度広島市公文書館収集写真展
 フィルムのなかの日常～カメラと暮らした昭和の記憶～
 発 行 広島市公文書館
 広島市中区大手町四丁目 1 番 1 号 大手町平和ビル
 TEL (082)243-2583
 広 D3-2025-676